

Ⅰ 未来に向かう先進人工システムへの期待



(財)エネルギー総合工学研究所  
理事長 秋山 守

21世紀の開幕を目前にして、先端科学技術の動きは最近ますます目覚ましいようです。わけでも、情報の分野の勢いは一段と激しくて、情報を扱う基盤や環境の高度化と並んで、コンテンツ自体も極めて多彩なものとなってきています。それは広く科学技術・社会人文学・哲学・芸術などの、いわば“学芸融”に向かう大きな潮流”とも見ることができるでしょうか。

その背景には、近頃流行の“感性”“アメニティ”“知遊”などの言葉に象徴されるような、これまで以上に自由で豊じょう(饒)な“人間精神”への、いわば渴望があるようにも思えます。

そうであれば、機械でも建築物でも、あるいは町全体の姿にまでも及んで、これからの人工物は“遊び”や“面白さ”の要素が強く前面に出る方向にいくのではないかと予感されます。

もちろん昔から、人々はたくさんの夢を描き、その実現に努め、あるいは後世に望みを託そうと願ってきました。古くはバベルの塔や空中庭園などの着想がありますが、それらは現代ではガウディのサグラダ・ファミリアや、都心のガーデン付き高層ビルとして具現してきているように思えます。そして、それらは時代ごとの文化の影響を受けたとはいえ、多くは個々の天才の勢いのなせる業であつたらう、と思います。

これからは、そうした“創像”にかけての個人の天分に加えて、情報科学技術の支援による“人工知情 = Artificial Imagination”の世界が期待されるように見え、そうであれば無限に彩る新たな創像世界への扉が、今正に開きつつあ

るように思えるのです。そして、このように人の感性を受けて創像された人工物は、それ自体として、これまで以上に感性を内包していくとも思えるのです。

ところで、これまで、機械に人の名前や愛称を付けて優しくきめ細やかに接することは随所で行われてきました。実際、工場や発電所などの現場を見学させていただくとき、担当の方々が人工物を慈しみ愛するお気持ちを持ってられるのを感じずにはられません。

日常生活でも、例えば車を運転するとき、今日は調子が良いなと思ったり、どうもご機嫌が芳しくないと思ったりするとき、そこには幾分かの感情の移入があり、心なしか、いとおしい気さえしてることがあります。

いつか見たマンマシンインタフェースのイラストですが、見事に設計され順調に動いているシステムは笑顔をしており、そうでないものは泣き顔であったように記憶しています。とすれば、時には思慮深い表情だとか、いささか意地悪い顔なども出てくるのでしょうか？

ともあれ、これからは機械に限らず、建物も街全体の景観も、そしてさらにはソフトな情報通信や社会経済のシステムなどにも及んで、すべからく精神的交流の対象として、これまで以上に親しみと深い感興を覚えるのです。

電力を生み出し、そして、いずれは熱や燃料や淡水や光をも広く視野に入れる原子力プラントは、正に未来に向かう先進人工システムであります。それは近い将来、さらに“知・情・意”の次元も取り込んだ総合活力源として、また多彩な交流のキーステーションとして発展し、その中でインタフェースの役割も一層増していくと思えるのです。